顕在・潜在的内的作業モデルが自己愛に及ぼす影響

—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—

○大浦真一¹・福井義一²・松尾和弥¹

(¹ 甲南大学大学院人文科学研究科・² 甲南大学文学部)

キーワード: 内的作業モデル, 潜在連合テスト (IAT), 自己愛

Effect of explicit/implicit internal working models on Narcissism

Shinichi OURA¹, Yoshikazu FUKUI², Kazuya MATSUO¹

(¹ Graduate School of Konan University, ² Konan University)

Key Words: Internal Working Model, Implicit Association Test, Narcissism

目 的

自己愛は、自尊感情を適度な状態に調節 (川崎, 2011) して個人の社会適応を助ける側面を持つ一方で、高じると脅威場面において攻撃行動が生じやすくなる (Stucke et al., 2002) といった不適応な側面も併せ持っている。

自己愛の多寡に関連する要因として、親の養育態度が指摘されていることから (例, Kohut, 1977; 福井・大浦他, 2014), 養育者との相互作用で形成される愛着との関連が推測される。実際、大浦他 (2015) は、虐待的養育環境が愛着の内的作業モデル (IWM) を媒介して自己愛に影響を及ぼすことを報告している。

近年、IWM について、その顕在 (意識) 面だけでなく、潜在 (無意識) 面を測定することの重要性も指摘されている (坂上, 2006)。そのため、大浦他 (2014a) は、IWM の顕在面について自記式尺度を、潜在面について潜在連合テスト (IAT: Greenwald et al., 1998) を用いて測定し、顕在的 IWM との関連が報告 (福井他, 2013) されている情動コンピテンスに及ぼす影響を検討した。その結果、IWM の顕在・潜在面の一致・不一致によって情動コンピテンスの下位尺度の「状況の読み取り」に違いが生じることを示した。また、大浦他 (2014b) は、顕在・潜在的 IWM がライフイベント (LE) に及ぼす影響を検討した結果、潜在不安が対人領域のネガティブ LE に正の影響を及ぼすことを明らかにした。このように、IWM を顕在・潜在の両面から検討することの重要性を裏づける結果が報告されつつある。しかし、大浦他 (2015) は、IWM の顕在面が自己愛に与える影響のみを検討していたため、潜在面も含めた検討には意義があると思われる。また、自己愛人格者の誇大的な自己顕示行動の背景には、潜在的な自己無価値観が指摘されており (Kernberg, 1975)、これまで顕在・潜在的自尊感情との関連 (例, 藤井他, 2014) が検討されてきたが、IWM の自己観である潜在的見捨てられ不安 (潜在不安) も自己愛の誇大的側面と関連することが予測される。そこで本研究では、顕在・潜在的 IWM が自己愛に及ぼす影響を検討した。本研究での仮説は、「潜在不安は優越感・有能感と自己主張性に正の影響を及ぼす」であった。

方 法

実験協力者: 平均年齢が 18.70 歳 ($SD = .823$) の大学生 44 名 (男性 19 名, 女性 25 名) であった。

変数: 1) 潜在的 IWM: 藤井ら (2012) の不安・回避 IAT を用いて、潜在不安と潜在回避得点を得た。2) 顕在的 IWM: 一般他者版成人愛着スタイル尺度 (Brennan et al., 1998; 中尾, 2004) を用いて測定し、顕在不安と顕在回避得点を得た。3) 自己愛: 自己愛人格目録短縮版 (NPI-S; 小塩, 1998) を用いて注目賞賛欲求、優越感・有能感、自己主張性得点を得た。

なお、本研究の顕在・潜在的 IWM のデータは、大浦他 (2013, 2014a, 2014b, 2014c, 2014d, 2015) と同様であった。

結 果

自己愛の各下位尺度を従属変数、性別と年齢を統制変数、顕在不安・回避と潜在不安・回避を独立変数、さらに顕在不安×顕在回避、潜在不安×潜在回避、顕在不安×潜在不安、顕在回避×潜在回避の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を実施した。その結果、注目賞賛欲求に対して、顕在回避の効果が有意 ($\beta = -.501$)、優越感・有能感に対して顕在不安の効果は 10% 水準で有意 ($\beta = -.283$) であった。さらに、自己主張性について、顕在回避 ($\beta = -.408$) と潜在不安×潜在回避の交互作用が有意であった。得られた回帰式に両下位尺度得点の $\pm 1SD$ の値を代入した結果を Figure 1 に示した。単純傾斜の検討を行った結果、潜在回避が低い場合、潜在不安の効果は有意 ($\beta = .884$) に、さらに潜在不安が低い場合、潜在回避の効果は有意 ($\beta = .831$) となった。

Figure 1 自己主張性に対する潜在不安・回避の交互作用
考 察

本研究の結果、注目賞賛欲求と自己主張性に対して顕在回避の負の効果が有意、優越感・有能感に対して顕在不安の負の効果が有意傾向であった。注目や賞賛を浴びたり、自己主張的になったりするには他者が必要となるが、顕在回避が高いほど他者との関係を拒絶するので注目賞賛欲求や自己主張性が低くなるのかもしれない。また、顕在不安が高いほど自己価値を低めてしまうため、他者に対して優越感や有能感を持ちにくいかもしれない。本研究の結果は、潜在不安が優越感・有能感と自己主張性に正の影響を及ぼすという仮説を支持しなかった。その一方で、自己主張性について潜在不安×潜在回避の交互作用が有意であった。愛着型から検討した場合、潜在的な安定型よりも不安定型 (とらわれ型, 拒絶-回避型, 恐れ-回避型) において自己主張性が高かった。小塩 (1998) は、NPI-S の自己主張性を「自ら進んで行動を起こすといった、能動的かつ積極的な項目群」と述べていることから、潜在的に不安定型の者は、実際に能動的かつ積極的に行動する、またはそのようにできていると自覚することで自尊感情を高めて社会適応している可能性が考えられる。福井・大浦 (2015) は、愛着型の顕在・潜在面は不一致が多いことを指摘していることから、今後は愛着型の顕在・潜在面の一致・不一致が自己愛に及ぼす影響を検討する必要もあるだろう。